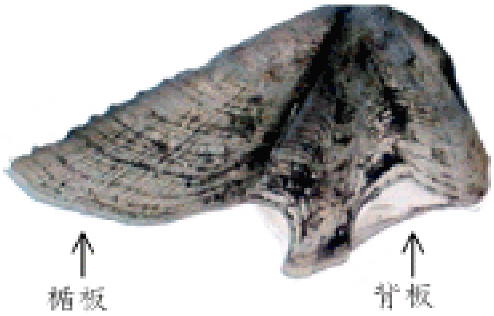
19世紀の初めごろまで，フジツボ類は貝類，イカ・タコ類と同じ軟体動物と考えられていました．その後，孵化した幼生が甲殻類に共通した幼生，すなわちノープリウス幼生になることが分かり，節足動物として扱われるようになりました．フジツボ類はこの幼生期の次ぎにキプリス幼生になり，適当な基質があればそこに着底し，親へと変態します．

つる脚を伸ばした個体．１ページと同一個体．

フジツボ類はいちど定着すると，その場所から移動できません．甲殻類ですから，脱皮をくり返して成長します．脱皮は石灰質の殻の中でおこない，脱皮殻は蓋板（がいばん）を開いて捨てます．

アメリカフジツボの蓋板



蓋板は楯板（じゅんばん）と背板（はいばん）からなります．上の写真で糸のようなものが見えますが，これは餌を採るための蔓脚（つるあし；まんきゃく）で，エビ類などに見られる胸肢が変化したものです．これを伸ばしてはすぐに取り込むことをくり返します．蓋板を開いているフジツボにそっと近づき，手をかざすとフジツボは蓋板を閉じるので，カチッという音が聞こえます．

2005年５月４日発行　発行者：町田吉彦（理学博士，高知大学理学部教授，
四国自然史科学研究センターセンター長）

本書の内容の無断複製を禁止します．複製ならびに内容についての問い合わせはFAX 088-844-8310（町田研究室直通）でお願いします．